とみいし会報

教祖百四十年祭

晴天の心

立教１８７年３月号
大阪府富田林市寿町 4-9-10
URL:www.tomiishi.net
TEL:0721-23-3466　090-5243-4669

月次祭３月19日（火）午前１０時～
婦人会例会　3月 9日（土）午前10時～

今年は梅の開花が早く満開も見頃もあっという間だったように思います。時々訪れる、道明寺天満宮の梅林も例年ならまだ楽しめるのですが、今年はすでに終わりだそうです。

その道明寺天満宮で、1 月 25 日にうそかえ祭りが行われました。昨年何も調べずに訪れて木彫りの鷽を頂いて帰ったので今年はそれを持って行って、初めてのお参りでした。私は行けなかったのですが、嫁さんと娘で行ってきました。

うそかえ祭とは？
菅原道真公が無実の罪で大宰府に左遷され、任地に到着された翌年 1 月 7 日、神事をされている時に、寒中なのに無数の蜂が襲来して参拝者を悩ましました。そこに一群のうそ鳥が飛来し、蜂を食い尽くして人々を救いました。
このことから、当宮では毎年 1 月 25 日の初天神の日に、身替災難除けとして「うそかえ祭」を行い、神職が 1 年がかりで奉製した手彫りの「うそ鳥」を授与しています。（道明寺天満宮ＷＥＢサイトより引用）

うそかえ祭りを知ったのは、さだまさしさんの歌「うそ替」がきっかけです。

うそ替　（アルバム孤悲）
今宵大宰府の鷽替（うそかえ）神事　　暗闇の中で誓います
わたしの言葉で傷つけたこと　　全てを懺悔（さんげ）いたします
知らずについた嘘でさえ　　まことに替わりますように
淋しい悲しい毎日が　　さいわいに替わりますように
木彫りの鷽の鳥　神様取り替えて　替えましょ・・・
・・・

人は、知らず知らずのうちに嘘をつくことがあります。真正直に生きている人でも、自分をまもるためにいつの間にかついてしまっていることがあります。おそらく無意識のうちにしている場合もあるでしょうし、意図的にしていることもあると思います。
それを、うそ鳥という木彫りの鳥に託しして交換していく。自分のついた嘘が他人のところに渡っていき、無かったことになる、それが、いつのまにか誠に変わってしまう。
不思議な祭りです。　おやさまの言葉では、八つのほこりの続きとして、

月日にハ　うそとついしょう　これきらい　このさきなるわ　月日しりぞく　12 号-113
とあるように、「うそとついしょう」は神様が嫌いであるということが述べられいます。

月日とは、私たちの親なる神様のこと。心のほこりである嘘や追従を繰り返しているようであれば、ついには神様が退く、つまり神様のご守護がいただけなくなると、厳しく戒められています。

嘘とは、自らの利益や保身のために事実ではない偽りを言うことであり、他愛のないものから悪意のあるものまで様々です。追従とは、嘘の一種とも考えられますが、これも利益や保身のために、心にもない褒め言葉などで、人に気に入ってもらえるよう、こびへつらったりすることです。
もちろん、人のことを慮って本当のことを言うのを控えたり、心の底からの褒め言葉を掛けるというのは、悪しき心遣いからの言動とは言えないでしょう。しかし、自己中心的な考えから、たとえば、自分の欲しい物のために嘘をついたり、我が身を守るために追従を言ったりするような、ほこりの心遣いから発せられる言動。それこそ、神様が「これきらい」と言われる嘘と追従の実態です。
同じく「おふでさき」に、

　口さきのついしよばかりハいらんもの　　心のまこと月日みている　（十一 8）
とあります。
神様は、私たちの「心のまこと」を見定めておられます。嘘や追従は、その「心のまこと」からはほど遠い言動であり、常に気をつけなければなりません。

うそ替祭りで、自分のついたうそを取り替えたとしても、すべてが清算されるものではないですから、心を入れ替えてえ出直すきっかけの神事だと思います。
　神様の視点で物事を考えて発言し行動するようにすることが、「心のまこと」に繋がる道であるとおもいます。

災救隊基金について　■ 2024 年 1 月 3 日

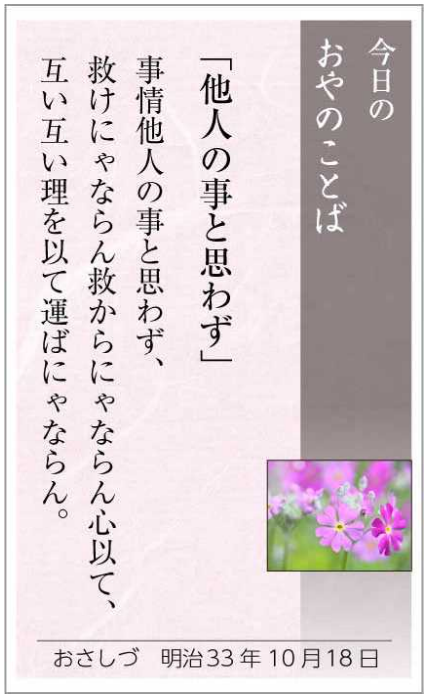
　天理教災害対策委員会（仲野芳行委員長）では、「天理教災害救援ひのきしん隊基金」を常設し、救援活動のさらなる拡充のために運営させていただいております。
　このたびの「令和 6 年能登半島地震」による被害が拡大している現状に対し、同基金を通して広く教内の真心を結集し、災救隊の活動支援および被災教区への復興支援に活用いたしますので、何卒、同基金の上にお心寄せをいただきますよう、お願い申し上げます。
　寄付方法は、災害対策委員会が指定した下記の口座への振り込み、もしくは、道友社１階カウンターおよび販売所「おやさと書店」で受け付けています。

　銀行振込の場合
ゆうちょ銀行または郵便局からの振り込み
口座記号番号　００９６０－５－１９７９６８
口座名義　天理教災害対策委員会

　他金融機関からの振り込み
銀行名　ゆうちょ銀行
支店名　〇九九店
預金種目　当座預金
口座番号　０１９７９６８
口座名義　テンリキョウサイガイタイサクイインカイ
※受領証を希望する方は、災害対策委員会事務局まで。電話 0743-63-1516（表統領室室務課）。
ご持参くださる場合
　天理市内の道友社１階カウンターおよび道友社販売所「おやさと書店」で受け付けています。

※受領証を希望する方は、受け付け時にお申し付けください。
　なお、本基金の会計年度は毎年 4 月 1 日から翌年 3 月 31 日まで。収支は定時集会で報告がなされるほか、『天理時報』および「天理教ホームページ」上に公示されます。

天理教災害対策委員会



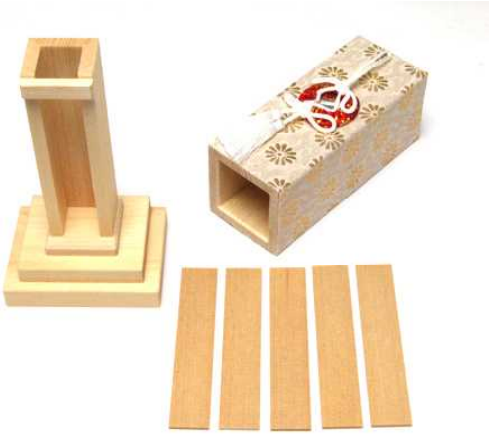
　先日、運転中に交差点で信号待ちをしていると、歩行者用の信号が青色に変わる直前に、年配の男性がゆっくりと歩きだしました。歩車分離式信号のある交差点なので、横断歩道を渡るのではなく、交差点を斜めに渡っていきます。
　最初は「もうしばらく待てばいいのに……」と少し苦々しい思いで眺めていましたが、男性の歩く姿を見ているうちに、自分の身勝手な考えを反省しました。
　杖を頼りに歩くゆっくりとした足取りでは、青信号の時間内に、広い交差点を斜めに横切るのは難しいのです。早めに歩きだしたのは、時間内に交差点を渡りきるためでした。
　もちろん、交通規則は順守しなくてはいけませんが、この男性の事情も理解できます。 「事情他人の事と思わず、救けにゃならん救からにゃならん心以て、互い互い理を以て運ばにゃならん」
　毎日の生活の中で、他人の行動を自分の尺度だけで評価したり、理解したりすることは少なくありません。
　でも、人にはそれぞれ事情があります。１０メートルの距離を数秒で歩くことに何の困難も感じない人もいれば、同じ距離をようやくの思いで歩ききる人もいるということを忘れてはならないでしょう。特に、老いは誰もが避けて通ることはできないのですから……。
　いつも相手の立場に立って、物事を理解し、判断する姿勢が大切ですね。（岡）

　2 月 19 日月次祭祭典後　伏井和典の五十日祭を執り行い、その後富田林西山墓地に納骨しました。当日は冷たい雨模様でしたが、故人の友人とも連絡がつき参拝いただきました。誠に有り難うございました。
　五十日祭で、荒魂として祀っているお社から、教会の御霊社に霊璽をお移り頂くのですが、祭文を奏上して警蹕をう～う～と口で唱えながら抱え込むようにしてお連れします。
霊璽の中から名前を書いた木札を抜いて、御霊社に納めます。
これからは、教会や自宅の御霊社に魂は収まってお見守りくださいと鎮めの祭文を奏上します。また、その後、納骨の際にもお墓に納めた後、納めの祭文を奏上いたしました。
以前は、それぞれの時に榊（玉串）が必要でしたが、今年から本部の方からの通達で、祭儀の見直しが行われ、無しでもかまわないということになりました。
　そぼ降る雨の中ではありましたが、無事納めることが出来て御霊もようやく落ち着いたことと思います。皆様誠に有り難うございました。

　後日談として、娘から訊いたことなのですが、私が荒魂を御霊社に移そうとしているときに、見てはいけないと思いながらも、つい、見ようとしてしまったところ、頭に雷の様な衝撃が走ったそうです。その後しばらくは頭が痛くて懺悔していたとのことです。
端から見るとその行為自体は意味がないようにも思えるのですが、やはり昔から伝えられた祭儀には何らかの見えない意味があり、それをすることで収まることが出来るのだとこの話から祭儀というものの必要性を感じました。

また、荒魂として祀っている時の雰囲気は、例えば生前の姿が 100 %だとすると 10 %に満たないサイズのように感じ、まるで、身体はなく着ていた服の上着がフワッと置かれているようなそんな感じだそうです。また、霊璽から、名前を書いた木札を抜いた時から、霊璽自体には何もなく、御霊社に納めたの書いた木札にその人の魂は収まっていると感じたそうです。

（右写真　霊璽→）



春と秋の御霊祭には、納められているお先祖様やゆかりある人たちの魂に御礼を申し上げるとともに、お社の中を掃除することも大切ですね。

教祖伝逸話編　25.七十五日の断食

明治五年、教祖七十五才の時、七十五日の断食の最中に、竜田の北にある東若井村の松尾市兵衛の宅へ、おたすけに赴かれた時のこと。教祖はお屋敷を御出発の時に、小さい盃に三杯の味醂と、生の茄子の輪切り三箇を、召し上がってから、「参りましょう。」と、仰せられた。その時、「駕篭でお越し願います。」と、申し上げると、「ためしやで。」と、仰せられ、いとも足取り軽く歩まれた。かくて、松尾の家へ到着されると、涙を流さんばかりに喜んだ市兵衛夫婦は、断食中四里の道のりを歩いてお越し下された教祖のお疲れを思い、心からなる御馳走を拵えて、教祖の御前に差し出した。すると、教祖は、「えらい御馳走やな。おおきに。その心だけ食べて置くで。もう、これで満腹や。さあ、早ようこれをお下げ下され。その代わり、水と塩を持って来て置いて下され。」と、仰せになった。市兵衛の妻ハルが、御馳走が気に入らないので仰せになるのか、と思って、お尋ねすると、「どれもこれも、わしの好きなものばかりや。とても、おいしそうに出来ている。」と、仰せになった。それで、ハルは、「何一つ、手も付けて頂けず、水と塩とだけ出せ、と仰せられても、出来ません。」と申し上げると、「わしは、今、神様の思召しによって、食を断っているのや。お腹は、いつも一杯や。お気持は、よう分かる。そしたら、どうや。あんたが箸を持って、わしに食べさしてくれんか。」と、仰せられた。それで、ハルは、喜んでお膳を前に進め、お茶碗に御飯を入れ、「それでは、お上がり下さいませ。」と、申し上げてから、箸に御飯を載せて、待っておられる教祖の方へ差し出そうとしたところ、どうした事か、膝がガクガクと揺れて、箸の上の御飯と茶碗を、一の膳の上に落としてしまった。ハルは、平身低頭お詫び申し上げて、ニコニコと微笑をたたえて見ておられる教祖の御前から、膳部を引き下げ、再び調えて、教祖の御前に差し出した。すると、教祖は、「御苦労さんな事や。また食べさせてくれはるのかいな。」と、仰せになって、口をお開けになった。そこで、ハルが、再び茶碗を持ち、箸に御飯を載せて、お口の方へ持って行こうとしたところ、右手の、親指と人差指が、痛いような痙攣を起こして、箸と御飯を、教祖のお膝の上に落としてしまった。ハルは、全く身の縮む思いで、重ねての粗相をお詫び申し上げると、教祖は、「あんたのお心は有難いが、何遍しても同じ事や。神様が、お止めになったのや。さあ／＼早く、膳部を皆お下げ下され。」と、いたわりのお言葉を下された。こうして御滞在がつづいたが、この様子が伝わって、五日目頃、お屋敷から、こかん、飯降、櫟枝の与平の三人が迎えに来た。その時さらに、こかんから、食事を召し上がるようすすめると、教祖は、「おまえら、わしが勝手に食べぬように思うけれど、そうやないで。食べられぬのやで。そんなら、おまえ食べさせて見なされ。」と、仰せられたので、こかんが、食べて頂こうとすると、箸が、跳んで行くように上へつり上がってしまったので、皆々成る程と感じ入った。こうして、断食は、ついにお帰りの日までつづいた。お帰りの時には、秀司が迎えに来て、市兵衛もお伴して、平等寺村の小東の家から、駕篭を借りて来て竜田までお召し願うたがその時、「目眩いがする。」と、仰せられたので、それからは、仰せのままにお歩き頂いた。「親神様が『駕篭に乗るのやないで。歩け。』と、仰せになった。」と、お聞かせ下された。